29) 前掲註3文献
村田六郎太・他『千葉・上ノ台遺跡』　千葉市教育委員会　1982
30) 石毛直道『住居空間の人類学』　鹿島出版会　1971
31) 大林太良「住居の民俗学的研究」　大林編『家』社会思想社　1975
32) 国分期に一般化する小型住居は「カマヤ」の分棟（石野　前掲）の真偽は別にしても，その中にあらゆる機能空間が存在したとするには狭すぎる。当然竪穴外に住居空間が及んでいたと考えざるを得ない。土間空間の成立という柿沼らの視座はここにこそ生きてこよう。

また古墳時代にも一部に柱穴の検出されない小型住居が存在する。これらが特殊な機能を持った竪穴であったが故に小型なのか，竪穴外にも住居としての空間が拡がっていたのかという問題がある。今後，竪穴の周辺にも目を向けた詳密な調査が望まれる。

（2班：千原台事務所）

近年の理論的動向

森　本　和　男

1970年代後半から社会科学のいろいろな分野でマルクス・ルネッサンスともいうべきマルクスへの再帰現象が広範囲にまき起こってきた。時あたかも昨年はマルクス没後100周年にあたり，また今年はエンゲルスの『家族，私有財産および国家の起源』出版100周年でもある。これを記念するさまざまな行事が世界各地で開催され，記念図書が各国で出版された。今日，学問におけるパラダイム転換の声が世界のあちこちで聞かれるが，その際にマルクス主義が重要な指針の一つを占めることはほぼ確実であろう。19世紀の学問的伝統が20世紀末になっても生き続けるという現象は少々奇異な感を受ける。もちろん19世紀に引用された細部にわたる事実記載はとっくに古ぼけてしまい，使いものにならない。それにもかかわらず19世紀の学問が提出した方法，分析，概念が今日でも議論の対照となり得ているのは，一つには100年前の人類の智恵から我々はあまり進歩していないのではないかという反省と，二つには20世紀になっても基本的には人間社会は決して良くなっていないのではないかという危惧によっている。

マルクスの考えた原始古代社会の姿は現在ではほとんど通用しない。その理由は，マルクスの拠った19世紀の人類学，歴史学の成果と今世紀の学問的到達点とがあまりにもかけはなれているからである。具体的に農業共同体論をすこしとりあげてみよう。マルクスの原始共同体観についての再検討は，第2次世界大戦後の60年代に再開されたアジア的生産様式論争の延長として70年代初頭から経済学，人類学，歴史学の各分野で国際的にまき起こった現象である。その際にロシアの革命家B．И．ザスーリッチあてのマルクスの手紙草稿に登場する農業共同体の実態も俎上にのせられたのである。マルクスが革命前の帝政ロシアの社会に関心を与せたのはロシア資本主義の発展性とロシア革命の方向性を探るためであり，そのマルクスへ送ったザスーリッチの手紙もロシア資本主義成立の可否とロシアの共同体（ミール共同体）の運命を問うものであった。[1)]

ザスーリッチあての手紙草稿にある農業共同体の概念を，マルクスはおもに古ゲルマン社会の研究とロシアのミール共同体の研究から導き出している。マルクスは古ゲルマン社会の研究をG．vonマウラーにおもに依拠していた。また，古ゲルマン社会学説史上において2分される一般自由人学説と領主制説のうちマルクスは前者に属していた。ところで，最近の古ゲルマン社会の研究によると，マウラーの重要な論点であるマルク共同体説や土地割替説はくつがえされ，しかも，学界を支配する学説も現在では一般自由人学説よりも領主制説が有力になってきたのである。マルクスの古ゲルマン社会像を今日の研究レベルと比較してみるとあまりにもおおきくかけはなれている。同様のことがミール共同体の研究にもあてはまる。ロシア

史の学者は，ミール共同体がマルクスの考えたように太古から存続しつづけてきたわけでは決してないこと，土地割替が17世紀に開始すること等を明らかにした。マルクスの農業共同体論は最近の研究レベルからするとその細部においては古くさいものとなってしまっている。しかしながら，全人類史的見地から構築された「資本論」体系における農業共同体の位置は，原始古代社会を解釈するにあたって今日でも重要な分析手段を導いている。[2)]

マルクスの考えた農業共同体を日本の原始社会のある段階，すなわち弥生時代にあてはめようとする説があるが，[3)] マルクス自身のとらえた農業共同体は古ゲルマンの社会状態とロシアのミール共同体であり，これらの諸共同体を日本の原始社会にすぐさまあてはめることは不可能であると同時に，ザスーリッチへの手紙草稿上で論じられた未完成な分析方法をそのまま応用して日本の原始社会を解釈することは困難である。最近では農業共同体論を第3世界の社会主義化，非資本主義的発展性に関連して論じる場合もあり，その解釈の内容は豊富となっている。日本の原始古代社会もこのような世界的見地から位置づけをおこなわなければならないだろう。

ここで世界の数ヵ国における原始古代社会の解釈に関する流れを略述しておこう。

アメリカ

マルクス・エンゲルスに多大な影響をあたえたL．H．モルガンは第1次世界大戦までは自国のアメリカ国内でも重要視されていた。その後，ドイツのF．ボアズに理論的起源を負う文化人類学が興隆した。地理的環境を重視するこの学派はそれ以前まで支配的であった進化論的人類学にうち勝ち，1950年代までアメリカ人類学界の主流を占めるのである。一方，モルガンの学説を細々と守っていたのはL．ホワイトであったが，彼はソヴェトの人類学者にきびしく批判された。しかし1960年代以降，ホワイトの評価はたかまり，多系進化を唱えるJ．ステワードと結びつけられるようになった。そして，ホワイトとステワードの学説を統合する「文化生態学 cultural ecology」派が生まれた。彼らは単一の原理に支配される多系的発展を主張している。この文化生態学からM．ハリスの文化的唯物論 cultural materialism が発展した。ハリスはマルクス主義者を自認してはいるが，およそその主張にはマルクスの見解がふくまれておらず，むしろマルクスを否定している。

L．ビンホードによるニュー・アーケオロジーの勃興は目ざましく，現在では欧米の学界に大きな影響をあたえている。ビンホードはホワイトのもとで勉強し，ステワード，G．チャイルド，R．J．ブレイドウッド等の新進化主義，およびW．タイラーの機能主義的側面に影響を受けている。この学派の提起した考古資料解釈の様々な問題はすでに1920年代後半にソヴェトの考古学者達によって論じられていた。

イギリス

進化主義を否定するB．マリノウスキー，J．ジョレスと密接な関係にあったE．デュルケィム，およびデュルケイムの考え方にもとづいたA．R．ラドグリフ・ブラウン等がイギリス人類学を築いた。1920～60年のイギリス人類学の黄金時代にマルクス主義はあまり関与していない。1960年前後に顕著となるC．レヴィ・ストロースの強力な影響力に若干動揺をきたすが，マリノウスキー，ラドグリフ・ブラウンの伝統は堅持された。保守的なイギリス人類学は現在でも構造主義やマルクス主義にあまり耳を貸そうとしない。

社会発展の歴史的理論に関し，1960年代初頭にイギリス共産党の理論誌『マルキシズム・ツディ』誌上で一連の論争があった。スターリン批判後のアジア的生産様式の復権を含め，公式的な唯物史観の社会発展法則の再検討がなされた。西ヨーロッパ近代社会を浮き彫りにすると同時に非ヨーロッパ社会，とくに中国，インド，アフリカの歴史的発展の継起段階が重要な論争点となる。原始古代の社会構成体の実態および封建制への移行が奴隷制，共同体との問題ともからめ，中国の青銅器時代，ギリシャ・ローマの奴隷制，インドの奴隷制，アフリカの奴隷制等の具体例によりつつ世界的視野から論ぜられたのである。

最近欧米諸国でG．チャイルドがふたたび見直されつつある。それを反映してか，チャイルドの評伝も数種類あいついで出版されている。チャイルドはヨーロッパとオリエントの先史時代を総合した考古学者として評価されたが，その一方で彼は1960年代から70年代にかけて論じられた考古学上の方法，解釈，哲学的側面について早くも1930

年代から意識的に追求していた。チャイルドの理論的な観点は当時の欧米の学界には評価されず，埋もれたまま時を経て70年代後半になってやっと日の目を見るのである。その際にチャイルドとマルクス主義との結びつきが注目されている。1934年に彼はソヴェトを訪問するのであるが，当時のロシアの考古学は公式マルクス主義への考古学の編成をめぐって大きな変換点に達しており，ソヴェト考古学の理論的動向にチャイルドがつよく左右されたことは疑いえない。このような歴史的背景があるため，チャイルドの理論的功績は西側の考古学者にはほとんど認められず，逆に東側諸国において高い評価をよんだのであろう。

フランス

イギリス人類学が西欧全体を近年までおおっていた事実に対抗して，フランスのマルクス主義人類学が成長してきた。レヴィ・ストロースの構造人類学はソヴェトマルクス主義にみられるような一般化理論とは相容れなく，それはフランス人類学によくみられる態度であった。1960年代になってマルクス主義人類学をになう学者が雨後の筍のように出現した。この傾向はスターリン批判の後にソヴェト正統派への論評が自由になったことと，ベトナムやアルジェでの政治的動向がフランス国内で左翼的雰囲気を再興させたことに由来している。フランスの人類学者達によって伝統的なアフリカ社会が公式的なソヴェトの5段階説に一致しないことがまず指摘され，これをきっかけにアジア的生産様式の復活が真剣に討議されだしたのである。それらの成果がまとめられ，1964年に有名な『パンセ』第114号(「アジア的生産様式問題」特集号)が世に出された。アジア的生産様式の再検討はフランスだけでなく，イギリス，イタリア，東ドイツ，チェコスロバキア，ハンガリー，中国においても平行して進んでおり，このような国際的状況を前にしてソヴェトの学界も何らかの対応をせまられ，1964年以後アジア的生産様式をあつかった古代史，東洋学，民族学の論文がソヴェト内でも続々と発表されたのである。

アジア的生産様式論争の復活後，フランス人類学は活況を呈する。M．ゴドリエの構造人類学，アルチュセール主義，経済人類学，マルクス主義人類学，機能主義人類学等さまざまな学説が渾沌とした状況で論争をつづけている。この人類学の状態が考古学にも反映し，考古学における解釈と説明をめぐって活発な討論を呼んでいるのである。

ソヴェト

マルクス・エンゲルスの死後，唯物史観による人類学がソヴェトの人類学へと発展する道程にP．ラフルゲェとK．カウツキーが存在した。しかし，ソヴェト人類学の基礎を築いたのはG．プレハーノフであった。彼はドイツの地理的人類学派の影響をうけ，マルクス・エンゲルスの学説に地理的要素をつけ加えた。初期ソヴェト政権の人類学への関心は2つの問題点をめぐって寄せられた。一つはソ連国内での民族問題であり，もう一つは農奴（農民）および農村の問題であった。革命後に成立したソヴェト人類学には現在にいたるまですくなくとも3つの段階が存在する。第1段階はモルガンの学説を基礎にした原始社会像への疑問であった。エンゲルスの理論に対する疑問は学問上重要な役割を演じていたが，それは第2次世界大戦とスターリン主義によって抹殺されてしまう。歴史の5段階説に代表されるスターリン主義の横行は第2段階の特徴であり，ソヴェト人類学の教条主義化と空洞化をもたらした。スターリン主義が排斥された後，1950年代後半から1960年代の前半にかけて20年代から30年代に論じられた問題がふたたびとりあげられるようになった。そして60年代のフランス人類学のソヴェト人類学への影響が理論的水準の向上に拍車をかけたのである。現在のソヴェト人類学は諸々の社会科学や自然科学の分野との学問的境界をとりはらい，総合的学際的研究を展開している。

18世紀後半に端を発するロシア考古学の伝統はギリシャと関連性のあるスキタイ文化の解明をめぐり，古典考古学と同時に成長しはじめた。19世紀中葉にはロシア考古学会，モスクワ考古学会が設立され，考古学関係の博物館も多数開設された。革命前スラブ，ロシアの考古学は歴史学というよりも，自然科学や，いわゆる芸術学としてあつかわれた。革命後，考古学もマルクス・レーニン主義の枠の中にはめられてしまうが，史的唯物論を基礎にする考古学上の理論的成果を無視することはできない。残念ながらソヴェト考古学も人類学と同様にスターリン主義の悪影響にさらされた。スターリン主義批判の後にD．ダニエル，J．クラーク，D．クラーク，L．ビンホード等の西側

の考古学上の理論的評価をめぐり，考古学における分析，方法，原始古代社会の構造，および先史時代を含めた世界史の法則性等がふたたびソヴェト内で論争の題目となった。1970年代にはいるとモスクワ，レーニングラードで大会が開催され，またそれに対応して理論的問題に関する多数の論文が発表された。

中　国

中国は古くから歴史を愛好する国であるが，歴史学，とくに古代史学の近代化は王国維，羅振玉を待たねばならなかった。そして原始古代社会の社会科学的叙述をはじめて行なったのは郭沫若であった。中国古代社会の分析はそのまま当時の政治的動向を反映していた。つまり，日本をふくめた西欧列強諸国の被植民地と化した中国を独立した近代国家へと導びくために，中国の独自性，封建的性格を世界史の過程のなかで解明していくという，まさに中国の命運を賭した研究であった。戦前のアジア的生産様式論争に中国でも多数の学者が参加したが，30年代にソヴェトで論争が抹殺されてからは中国においても論争は下火になった。それ以後現在にいたるまで長期にわたって中国でおもにとりあげられた題目は中国古代史分期の問題であった。それはそのまま中国の奴隷制，封建制さらには土地制度，官僚制度，古代東方専制国家，前資本主義社会の実態にせまろうとする研究であり，その対象，内容は多枝にわたっている。けれどもいまだに結着らしい結着はついていない。

中国ではマルクス・レーニン主義が教条主義的に横行しており，原始古代社会に関する理論的水準もモルガン・エンゲルスの段階を脱していない。いまだに母系制から父系制へ単系的モデルを唱えている。欧米，ソヴェトの近年の理論的成果はまったくと言ってよいほど紹介されていない。たぶん文化大革命の後遺症なのであろう。

インド

ながらくイギリスの植民地であったインドでは，その学風もイギリスに近い。1970年代になってインド考古学の重鎮H．サンカリアがニュー・アーケオロジーをインドに紹介している。依然として実証主義的雰囲気が濃厚のようである。

註

1）和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房　1975　p.167～172，および Shanin, T, edit. *Late Marx and Russian Road.* Routledge & Kegan Paul. London. 1983. Part I．参照。この手紙を世に紹介したリャザノフの意図もロシア共同体についてマルクスの見解を正すことにあった。Rjazanov, D. Vera Zasulič und Karl Marx. *Marx-Engels Archiv* Bd. I. *Zeitschrift des Marx-Engels Instituts.* Moscow. 1926.S.314　当時ソヴェトでは農業問題が大きな国家的政策としてとりくまれていた。結局，ロシアの共同体はスターリンによって上からの力でコルホーズへと改組される。Hussain, A. and Keith, T. *Marxism and the Agrarian Question.* The Macmillan Press. London. 1981. p. 235～286参照。

2）古ゲルマン社会とロシアのミール共同体に関する近年の文献は多数あり，ここでは省略しておく。

3）原島礼二『日本古代社会の基礎構造』未来社 1968　p.20～21，都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史』　東京大学出版会　1970　p. 49～50，都出比呂志「原始」『日本歴史』26　岩波書店　1977　p. 9，12，

参考文献

Artsikhovskii, A. V. Archaeology. *Great Soviet Encyclopedia, A Translation of the Third Edition* (1970). Vol. 2. p.245～250,

Bailey, A. M. and Llobera, J. R. *The Asiatic Mode of Production.* Routledge & Kegan Paul. London. 1981.

Binford, L. R. *Working at Archaeology.* Academic Press. New York. 1983.

Bloch, M. *Marxism and Anthropology.* Oxford University Press. Oxford. 1983.

Bromley, Y. V. *Theoretical Ethnography.* Nauka. Moscow. 1984.

Gellner, E. *Soviet and Western Anthropology.* Columbia University Press. New York. 1980.

Green, S. *Prehistorian.* Moonraker Press. Wiltshire. 1981.

Kahn, J. S. and Llobera, J. R. *The Anthropology of Pre-Capitalist Societies.* The Macmillan

Press. Londno.1981.

Kohl, P. L. Archaeology and Prehistory. *A Dictionary of Marxist Thought.* Basil Blackwell. Oxford. 1983. p.25～28.

Klejn, L.S. Marxism, the Systemic Approach, and Archaeology. *The Explanation of Culture Change.* Gerald Duckworth & Co Ltd. London. 1973. p.691～710

————A Panorama of Theoretical Archaeolgy. *Current Anthropology.* Vol. 18, No. 1. 1977. p. 1～42.

Kuper, A. *Anthropology and Anthropologists.* Routledge & Kegan Paul. London. *revised editi.* 1983.

McNairn, B. *The Method and Theory of V. Gordon Childe*. Edinburgh University Press. Edinburgh. 1980.

Miller, M. *Archaeology in the U. S. S. R.*. Fredrick A. Praeger. New York. 1956.

Renfrew, C., Rowlands, M. J. and Segraves, B. A. *Theory and Explanation in Archaeology.* Academic Press. New York. 1982.

Sankalia, H. D. *New Archaeology.* Ethnographic & Folk Culture Society. Lucknow. 1977.

Ter-Akopian, N. B. Asiatic Mode of Production. *Great Soviet Encyclopedia, A Translation of the Third Edition* (1970). Vol. 1. p.422.

Trigger, B. G. *Gordon Childe.* Columbia University Press. New York. 1980.

Turner, B. S. Asiatic Society. *A Dictionary of Marxist Thought.* Basil Blackwell. Oxford. 1983. p.32～36.

Академия Наук СССР. Институту Археологии 60 Лет. *Краткие Сообщения* 163 Наука. Москва. 1980

Генинг,В.Ф. *Очерки по Истории Советской Археологии.* Наукова Думка. Киев.1982.

白钢『中国封建社会長期延续問題论战的由来与发展』中国社会科学出版社．北京．1984.

林甘泉，田人隆，李祖德『中国古代史分期论战五十年』上海人民出版社．上海．1982.

文史哲雑誌編輯委員会『中國古史分期問題論叢』中華書局．北京．1957.

市川泰治郎『社会構成の歴史理論』未来社．1977.

後藤明「「シンボリック・アーケオロジー」の射程」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第2号，1983. p.293～3

———「欧米考古学の動向」『考古学雑誌』第69巻第4号 1984. p.87～137

福冨正実「ソ連邦の諸文献において再開されたアジア的生産様式論争の経過と若干の問題点について」『アジア的生産様式論争の復活』未来社，1969.

———『アジア的生産様式と国家的封建制』創樹社．1981.

———「解説」『前資本主義的構成体の諸問題Ⅰ』未来社．1982.

この小文は近日ケンブリッジ大学出版局から出された *Marxist Perspectives in Archaeology* の Spriggs の巻頭論文を訳した際に付したものである。この方面に興味のある方は，ちょっと古くなってしまったが，ソヴェトの学者 Klejn の論文を読まれるよう推薦する。

ニュー・アーケオロジーの旗手，ビンホードは考古学にパラダイムの概念をさかんに適用しようとしている。アメリカ社会学流のパラダイム論が，はたして他の大陸の学問に適用しうるかどうか，はなはだ疑問である。パラダイム論の提唱者である科学史家トマス・クーンですら，10年以上も前にパラダイム概念を放棄してしまったのである。アメリカはベトナム戦争敗北による経済的，社会的動揺から立ち直ることができず，さながら落暉の弧線を描きつつ地に落ちんとしている。アメリカ人にとって未曾有の体験を，彼ら自身が今だに消化しきれていないのである。アメリカ以外の諸大陸における学問の歩みを一瞥してみると，そこには学問独自の流れとはまったく別個に，戦争，革命，粛清等々の社会的動乱が個々の研究者の胸中に強く影響をおよぼしたことがわかる。近々，ソ連で考古学史に関する本 *Страницы истории руской археологии* が出版されるという。その本を手にしてから，アメリカ以外の，特にソ連，中国における考古学の発達を論じてみたい。

（研究部）